

鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器と船穂郷

糸川道行

はじめに

印西市戸神に所在する鳴神山遺跡（鳴田・田形1999、石田1999、萩原2000、岡田・森本2005、齋藤2015、小牧2017）は奈良・平安時代の拠点集落であり、下総国印播郡船穂郷の中心集落の一つである。鳴神山遺跡では隣接する白井谷奥遺跡と合わせて1,000点以上の文字・記号資料が出土したが、そのなかに「馬牛子皮カ身體カ」と書かれた墨書土器がある。この墨書土器は平安時代の村落と馬・牛との関りを伝えるものである。本稿の目的はこの墨書土器を通して奈良・平安時代の下総国の集落遺跡における馬・牛のあり方を考えることである。不明な点が多いが、船穂郷・印播郡・下総国の奈良・平安時代の集落研究を進める一助とする。

1 鳴神山遺跡と周辺の奈良・平安時代遺跡

鳴神山遺跡（第1図1、以下本項では第1図の記述を省略）は干拓以前の印旛沼西端の北方台地上に位置する。立地する台地は広大な面積をもつ。西側には南西方から延びる支谷をはさんで白井谷奥遺跡（2）が位置するが、北側は鳴神山遺跡から平坦な台地が続いており、両者は一連の遺跡である。双方合わせて堅穴建物265棟、掘立柱建物51棟が発見された。鳴神山遺跡の東方は北から南に戸神川が流れる支谷であり、西根遺跡（3）が立地する（小林ほか2005）。西根遺跡の東方で鳴神山遺跡の対岸には船尾白幡遺跡（4・5）がある（糸川ほか2004、香取ほか2005、平井ほか2014）。戸神川の支谷に近い船尾白幡遺跡の西側部分（II遺跡）には「コ」の字形配置の掘立柱建物群が存在する可能性が高く、田形孝一はその建物群を船穂郷家の管理施設と考察している（田形2008）。船尾白幡遺跡¹⁾で見つかった堅穴建物の総数は75棟、掘立柱建物は41棟であるが、調査は台地の一部にとどまっておらず、調査区外に多くの遺構の存在を想定できる。奈良・平安時代の西根遺跡では戸神川の流路から長文墨書土器・木製の人形・馬形などが出土した。長文墨書土器のなかには「舟穂郷生部直弟刀自女奉」・「大生部

直子猪形代」と書かれたものがあり、この地で船穂郷長が祭祀行為を執行し、また、郷長の氏姓が埴生郡司と同じ大生部直氏であることがわかった（川尻2003）。本稿では郷家の主要施設の可能性が高い建物群を官衙風建物群²⁾とよぶが、船穂郷家の官衙風建物群の主体は船尾白幡II遺跡にある。船穂白幡II遺跡は地続きの船尾白幡I遺跡と一体の遺跡である。また、谷（西根遺跡）をはさんで西方至近に位置する鳴神山遺跡（白井谷奥遺跡を含む）もその内容・立地から西根遺跡・船尾白幡遺跡と関係する集落であり、この両集落が船穂郷の中心集落である。古代の鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡・西根遺跡の総合的な様相については、栗田則久氏がとりあげている（栗田2015）。栗田氏は鳴神山遺跡出土土器の編年を行い、それをふまえて集落の変遷や文字資料について言及した。また、鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡の掘立柱建物群や3遺跡の文字資料から大生部と丈部との関係や船穂郷の開発の様相について考察した。

次に、鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡をとりあげるが、一部に古墳時代後期の遺跡を含む。記載は紙幅の関係で水系等の地域毎に調査された遺跡を列記するのみとする。また、文献については省略する。

①印西市船尾地区周辺 木戸場遺跡（6） 船尾町田遺跡（7） 向ノ地遺跡（8） 油免遺跡（9） ②印西市松崎地区周辺 大久保遺跡（10） 前戸遺跡（11）・東海道遺跡（12） 松崎I遺跡（13） 松崎II遺跡（14） 松崎III遺跡（15） 松崎V遺跡（16） 松崎VI遺跡（17） ③印西市（旧印旛村）吉田地区周辺 仲内遺跡（18） 遂昌路遺跡（19） 東場遺跡（20） 木戸口遺跡（21） トヶ前遺跡（22） ④印西市（旧印旛村）岩戸地区 岩戸広台遺跡（23） ⑤印西市（旧印旛村）師戸地区 戸ノ内遺跡（貝塚）（24） 古山遺跡（25） ⑥印西市（旧本埜村）角田周辺 角田台遺跡（26） 式斗米遺跡（27） ⑦印西市武西、白井市谷田・清戸・神々廻周辺 北の台遺跡（28） 清戸遺跡（29） 神々廻宮前遺跡A地点（30）



第1図 鳴神山遺跡の位置と周辺の遺跡

(縮尺 約 1 : 50000 明治年間参謀本部陸軍部測量局作成の迅速図「白井村」・「龍箇寄村」・「取手驛」を1/2縮小・合成)

復山谷遺跡 (31) ⑧印西市泉・原山・大塚・小倉台
周辺 南西ヶ作遺跡 (32) 大塚前廃寺 (33) 高根
北遺跡 (34) ⑨印西市木刈・白井市平塚周辺 木刈
峠遺跡 (35) 向台Ⅱ遺跡 (36) 真木ノ内遺跡 (37)
木通内遺跡 (38) ⑩八千代市佐山・平戸周辺 道地
遺跡 (39) 間見穴遺跡 (40) 島田込ノ内遺跡 (41)
⑪八千代市保品周辺 上谷遺跡 (42) 栗谷遺跡 (43)
向境遺跡 (44) 境堀遺跡 (45)

2 船穂郷の郷域について

船穂郷の郷域を考えるうえで一つの前提がある。それは船穂郷が比較的広域な郷ということであるが、それを指摘したのは川尻秋生氏である。川尻氏は印旛沼南方・東方の地域は古墳時代から継続的に営まれた集落が多いため狭域であるのに対し、印旛沼西方・北方の地域は、遅れて開発されたため広い郷域になったとした(川尻2009)³⁾。この川尻氏の考察をふまえて船穂郷の郷域をみていく。

奈良・平安時代の遺跡分布から、船穂郷の東方の境は師戸川右岸(西岸)と考える。集落は船穂郷の中核地域である船尾白幡遺跡・鳴神山遺跡からみて、東方は師戸川右岸の印西市(旧印旛村)岩戸まで切れ目なく続く。その東方、師戸川左岸の台地は印播郡吉高郷の範囲と考える。師戸台地は発掘調査例が少ないが、師戸川下流東方の戸ノ内遺跡や中流域の古山遺跡では、奈良・平安時代の堅穴建物が見つまっている。密度の濃さは不明瞭であるが、師戸川東岸にも奈良・平安時代の集落がある。師戸川上流左岸の角田台遺跡・斗込遺跡も印播郡吉高郷内の遺跡とみる。角田台遺跡が所在する印西市(旧本埜村)角田周辺が吉高郷の北西の境界付近であり、ここから北方・北西方は印播郡言美郷の範囲と考える⁴⁾。角田台遺跡から西方の師戸川上流域は遺跡分布が薄く、郷の境界は不明瞭である。

角田台遺跡西方は船穂郷の北方地域でもある。印旛沼水系と手賀沼・旧鬼怒川水系の分水界であり、遺跡分布は非常に薄く、空白地帯が広がっている。船穂郷における奈良・平安時代の遺跡分布が、印旛沼に近いところから分水界中央にいくにつれて薄くなる様相は松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査成果からうかがえる。両遺跡では奈良・平安時代の墓・土坑が見つまっているが、堅穴建物はみられず、集落域とは異なった土地利用がされている。さらに北方は無住といってもよい地域である。この分水界周辺は養老雑令九条(国内条)で公私共利としたどこの郷(里)にも所属しない土地である。

しかし、公私共利の土地とはいっても、地理的な関係から主として利用したのは船穂郷の住人であり、他郷・他郡への交通路のほかに動植物の獲得や放牧などを行う場所として利用したとみる。考古学的な根拠資料はないが、乏しいが、動植物については、薪や丸太などに使用した木材、山菜、鹿・猪などの動物、鶏ほかの鳥類などがあるとみる。もちろん、以上の点について、吉高郷・言美郷・三宅郷などの周辺他郷や埴生郡などの利用を否定するものではない。南西ヶ作遺跡は船穂郷内でも北側にある集落である。その東方は不明瞭であるが、上記のとおり、分水界地帯になるにつれて集落分布は薄くなる。

大塚前廃寺は印旛沼水系と手賀沼水系の分水界に位置する遺跡である(佐藤・沼沢1973)。地理的には印旛沼側よりも手賀沼側から南に侵入する支谷に近いので、船穂郷だけではなく、三宅郷との関係もあると考える。正堂は葺棟建物が想定されている(今泉1990・1998)。また、所用瓦は下総国分寺と同範のものである。この瓦に「埴」の刻書があるが、下総国埴生郡を表したものとみる⁵⁾。その理由として、①大塚前廃寺が帰属する可能性がある船穂郷の郷長が大生部直氏であり、埴生郡司と同姓であること、②印西市別所の池ノ下遺跡から「埴生郡酢取郷車持部…」の墨書土器が出土していること、をあげる。近年の研究により、印旛沼北西地域の開発にさいしては印播郡司だけではなく、埴生郡司が関与していることが明らかになった(川尻2003、石戸2013、山路2016など)。大塚前廃寺の堂宇北側にある大溝は比較的大規模な道路である。この道路は直線的な道路として長く続くものではないが、西は下総国分寺に通じ、東は埴生郡に通じる道である⁶⁾。大溝については大塚前廃寺が下総国分寺と関わる比較格的の高い寺院なので、これほどの大規模な施設であるのかもしれない。しかし、この規模で長く続くなれば居住域を区画する境であってもよいと考える。すなわち、この大溝を境に南側が船穂郷、北側が三宅郷とみる。この考えが妥当であれば、大溝の南に位置する堂宇は船穂郷内ということになる。しかし、大塚前廃寺の場合、その性格上、郷の帰属はあまり問題にならないかもしれない。大塚前廃寺は埴生郡と下総国分寺との関係のなかで、印播郡西方地域の開発に寄与するために、周囲の集落に仏教の布教を進めた寺院と考察されている(山路2016など)。

鳴神山遺跡西方の様相をみる。東側で鳴神山遺跡と

分離しがたい白井谷奥遺跡は、西側の様相が不明瞭であるが、集落の密度は低くなる。白井谷奥遺跡から神崎川の支谷をはさんで南方に位置する北の台遺跡は調査面積が少ないため不明瞭であるが、同様に西側の遺構密度は低いとみる。白井谷奥遺跡西方の清戸Ⅱ遺跡では一部でまとまった集落が見つかった。清戸Ⅱ遺跡西方の神々廻宮前遺跡A地点は遺構密度が低い。神々廻宮前遺跡の西方に位置する谷田木曾路遺跡はかなり広く調査された遺跡であるが、奈良・平安時代の集落は見つかっていない。神崎川支流西岸に立地する復山谷遺跡では堅穴建物が1棟だけ見つかった。以上のように、神崎川上流域は奈良・平安時代の遺跡分布が薄い。神崎川流域については本来、古代人が制御できる可耕地であったとしても、東方から開発の波が強く及ぶのは清戸Ⅱ遺跡周辺までであり、その西方は微弱である。船穂郷の西方の境は本来あいまいなものかもしれないが、いわゆる「離れ国分」(中山1976)的な遺跡が発見される可能性があるため、西側の郷域については神崎川左岸(東岸)とする。復山谷遺跡西方はほかの郷とみるが、公私共利的な性格のほうが強いかもしれない。

木刈峠遺跡・真木ノ内遺跡・向台Ⅱ遺跡・木通内遺跡は手賀沼南岸や手賀沼から南に侵入する支谷を臨む台地上に立地することから三宅郷内の遺跡とみる。なお、三宅郷の郷域については以前、手賀沼に流入する亀成川南岸を含むと述べたが(糸川2018)、亀成川下流域までであり、中・上流域には及ばないとみる。亀成川中・上流域南岸の台地は奈良・平安時代の遺跡分布が薄い可能性があり、遺跡が少数見つかった場合は、言美郷内の遺跡とした方が妥当である。あるいはほとんど集落が存在しない場合は、分水界地帯まで続く公私共利の土地としての性格のほうが強いといえる。

視点を南方に転じる。神崎川南岸・平戸川流域・印旛沼西側南岸に立地する道地遺跡・島田込の内遺跡や上谷遺跡・栗谷遺跡などは印旛郡村神郷内の遺跡である。なかでも上谷遺跡は村神郷の郷家集落といえる遺跡である。

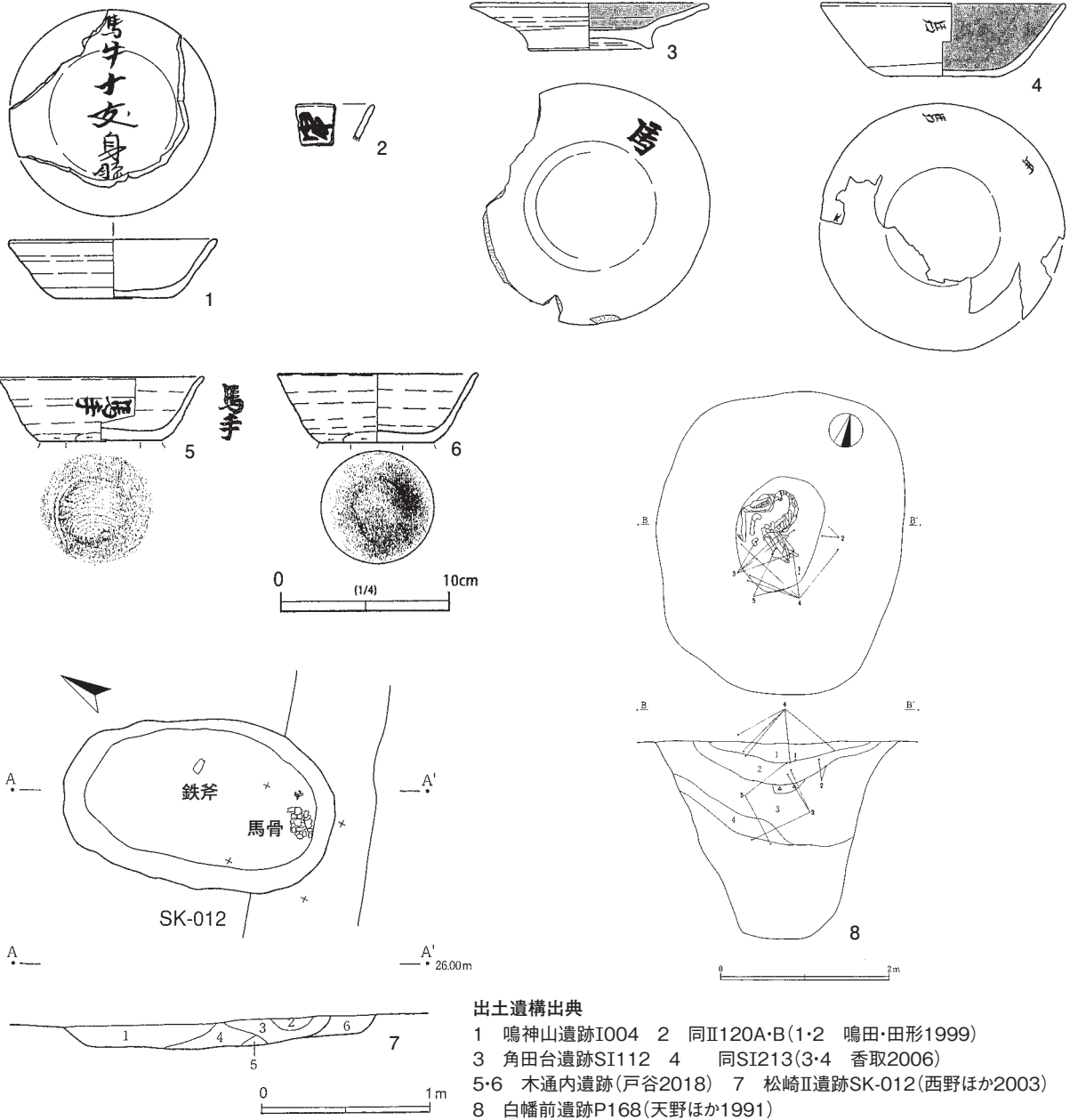
船穂郷の郷域についてまとめると、東方は師戸川右岸(西岸)、西方は神崎川左岸(東岸)であり、東西に長い広域な郷である。その西側北部、中枢地域から北方に位置する大塚前廃寺については三宅郷との境界に位置する遺跡とみた。三宅郷は船穂郷西側の北方以西に位置する郷である。船穂郷の東側北方の地域は印旛沼と旧鬼怒川水系の分水界となり、公私共利の土地

が広がる。郷の境界は本来、線状のものではない。船穂郷の東方については、師戸川を境にその東方は吉高郷の郷域である。また、印旛沼西側南岸及び神崎川中・下流域南岸は印旛郡村神郷の郷域である。以上、船穂郷の郷域と周辺諸郷との位置関係をみた。

船穂郷内の遺跡分布をみると、官衙風建物群が船穂白幡Ⅱ遺跡に営まれたのは必然と考える。すなわち中枢地域がこの地周辺であるのは鳴神山遺跡や船尾白幡遺跡が広大な台地上に立地することもあるが、それだけではなく、この地周辺が船穂郷において、交通路上最も重要な土地であったからである。船穂白幡Ⅱ遺跡からみて、南方には村神郷の郷家集落である上谷遺跡を中心とした保品地区の遺跡群がある。さらに平戸川流域を南に下ると、萱田遺跡群・村上込の内遺跡(天野ほか19974)や八千代市高津付近に所在するとみられる高津馬牧などが所在する。また、中枢地域から北方は三宅郷となる。三宅郷の郷家集落は不明であるが、船穂郷内において三宅郷の中心集落に向かうには鳴神山遺跡周辺が最も至便なところとみる。船穂郷の郷家が設営されるにあたっては、その土地のもつ力に加えて周辺諸郷との交通関係も影響したと考える。

3 鳴神山遺跡の「馬牛…」墨書土器と周辺遺跡の馬関係資料

鳴神山遺跡 I 044 堅穴建物から「馬牛子皮カ身體カ」と墨書された土師器杯が出土した(鳴田・田形1999)(第2図1)。「皮」と「體」については推定の文字であるが、「體」のほうは欠損部分にかかっているため断定されていない文字である。本稿ではこの2文字が「皮」・「體」であるとして記述を進める。「馬牛子」は「馬子」・「牛子」で、馬牛の管理や世話をする人物とみる。墨書は土師器杯の内面に、口縁部から底部中央をとおり、さらに反対側の口縁・体部に向かって記入されている。「馬」は先頭の文字で、口縁端部に書かれており、その前に存在する文字はない。「體」の次には文字が存在した可能性があるが、欠損のため不明である。土器はいくつかの破片の接合資料であるため、欠損部分が打ち欠きされたか断定しがたい。しかし、復元された実測図をみると、「馬」に近い欠損部は「馬」の際で欠けており、遺存する断面が弧状をなすことから、打ち欠きされた可能性があると考え。北東隅部から比較的まとまって出土したが、床面からかなり浮いた破片が多く、出土状況から祭祀性をうかがうことは難しい。I 044はこの墨書以外にも文字資料の出土が多く、「大」・



第2図 鳴神山遺跡周辺における馬牛関係出土資料

「大加」・「知益」・「富」・「成」などの墨書や「鬼」および人名とみられる「久弥良」などの線刻がある。出土土器の編年から9世紀中ごろに構築された竪穴建物とみる⁷⁾。

I 044は鳴神山遺跡のなかでは北側に位置する。竪穴建物の規模は4.2m×4.5mで、一般的な大きさである。カマドは西壁に位置する。カマドは北壁に位置する場合が多く、I 044周辺でも同様であるが、すぐ近くに位置するI 029竪穴建物は、カマドが西壁から北壁に付け替えられている。I 029はI 044よりも古い8世紀第4四半期頃の竪穴建物である。

鳴神山遺跡では、奈良・平安時代の道路遺構（II M004）が見つまっている。およそ東西を貫く道路で

あり、東側は戸神川の支谷（西根遺跡）に至る斜面を降りて行く（田形1998）。I 044はこの道路からはやや離れているが、南方すぐ近くに戸神川支谷から延びる緩斜面があり、ここからも低地に降りて行ったとみる。I 044は戸神川支谷に降りていくのに便利な場所に立地している。

I 044からはかなり南方になるが、鳴神山遺跡では大型円形土坑のII 040から馬骨そのものが出土した（鳴田・田形1999）。II 040は氷室または擬制的な井戸として使用された後に、廃棄にあたって祭祀行為が行われた遺構である。覆土中層から上層にかけて墨書土器を含む多量の土器が出土したが、馬骨は土器が集中して出土するレベルの直下から出土した。また、土器の上

からはハマグリを主体とする貝層が出土した。土器の時期から、この遺構が廃棄されたのは9世紀前葉である。馬の遺体は写真からは歯の部分だけであり、四肢骨は確認されていない。祭祀的な出土状況から雨乞いや雨止み等を祈念して殺されたか、あるいは保管していた馬の頭骨を供えた可能性もある。

鳴神山遺跡では、II 120A・120B重複竪穴建物から「甲牛」と釈読された墨書土器が出土した(第2図2)(鳴田・田形1999)。「甲牛」は土師器杯の口縁・体部外面に横位で書かれたものである。小片で出土位置が不明なため、どちらの竪穴建物から出土したかわからない。出土土器全体の歴年代はおおむね9世紀中葉であり、I 044と同時期である(栗田2015)。なお、「甲牛」は「甲午」にもみえるが、断定しがたいため報告書にしたがっておく。「甲牛」とした場合、意味は不明である。人名かもしれない。II 120A・120Bは道路遺構II M004に比較的近いところに位置する。

II 040及びI 044等の状況から、鳴神山遺跡では馬が飼育され、また、墨書として記される存在であったことがわかる。牛骨は出土していないが、墨書土器の様相から馬と同様に牛も飼育されていたと考える。

I 044から出土した「馬牛子皮身體」の墨書はほかの多くの文字資料とともに、何らかの祭祀行為に際して使用されたものである。その祭祀行為については、吉祥句とともに「鬼」や人名が出土していることから、総合的に考えなければならないが、馬・牛に関わる祭祀行為が含まれているとみる。

「皮身體」の文字から、鳴神山遺跡においては、死んだ、あるいは殺した馬や牛が解体され、おそらく肉は食肉として供され、皮はなめされていたとみる(松井1987)。なめされた馬牛の皮は下総国府または印播郡家等に運ばれ、工房で皮革製品にされた。解体やなめしの作業にさいしては、大量の水流が必要であるが、その作業場所は鳴神山遺跡の東に存在する戸神川であったと考える。なめしの行為にさいして、馬の場合は脳髓を使用したことが指摘されており(松井1987)、鳴神山遺跡においてもそのような行為があったのかもしれない。I 044は戸神川に行きやすい場所に立地しており、I 044の居住者か、あるいは近隣の竪穴建物の居住者が馬牛の解体やなめし等の行為に関わっていたと考える。人名とみられる「久弥良」(「久」・「久弥」を含む)の線刻土器はI 044のほかに10以上の竪穴建物・土坑から出土している。9世紀中頃の鳴神山遺跡における多出文字資料の一つであり、その分布も広域

である。

II 040の馬骨から脳髓を取り出しているかは不明であるが、馬の遺体は解体に伴う祭祀行為の後、集落にとって重要な遺構に供えられたものである。歯のみの出土であるが、頭部のみが供えられたか、全身が供えられたかは不明である。

次に、筆者の管見に触れた範囲であるが、鳴神山遺跡周辺における馬牛関係の資料をとりあげる。次項を含めて、あつかった資料は出土文字資料を主体とし、一部に馬骨等の遺体や文献史料を含む。なお、馬具は馬に関わる直接的な資料であるが、筆者の理解が不十分であるため、本稿では検討対象としない。土馬などの祭祀遺物についても同様である。

松崎II遺跡SK-012土坑からは馬の頭骨と鉄斧が出土した(第2図7)(西野ほか2003)。SK-012は方形区画墓SS-001の周溝部分に掘り込まれており、SS-001に伴う施設である。この土坑は小規模だが、報告・考察した西野雅人氏によれば、馬(西野氏はウマと表記)の頭部のみが埋葬された可能性と、全身が埋葬された可能性の双方が考えられるという。いずれにしても、方形区画墓の被葬者あるいはその集団と馬との密接な関りがうかがえる資料である。なお、奈良・平安時代の松崎II遺跡には竪穴建物がなく、居住域以外の墓域を含む別の土地利用がされている。

印西市角田台遺跡では2棟の竪穴建物から「馬」の文字資料が出土した(第2図3・4)(香取2006)。3はSI112から出土したもので、体部外面に正位で「馬」と書かれた土師器高台付皿が出土した。欠損部は意図的に打ち欠きされている。SI112のそのほかの文字資料は「国」・「仟」の墨書で、「馬」同様、土師器高台付皿の体部外面に記入されている。「国」墨書土器の欠損部も打ち欠きされている。なお非墨書土器であるが、須恵器杯の欠損部も打ち欠きされたものである。出土土器の様相から9世紀前葉の竪穴建物と考える。

4はSI213から出土したもので、土師器杯の外面に「馬」の線刻が横位で2字刻まれている。2字の間はやや離れている。SI213のそのほかの資料には「久須」・「月」・「生」・「大」の墨書、「恵」の線刻や記号的な線刻などがある。出土土器の様相からSI112同様、9世紀前葉の竪穴建物とみる。角田台遺跡では掘立柱建物が少なく、馬小屋遺構も確認されていないが、「馬」の文字資料が複数あることから、遺跡内で馬が飼育されていたと考える。なお、「久須」については、下総国相馬郡に多い久須波良部の氏姓を表している可能性

がある。我孫子市西大作遺跡では外面に「意布郷久須部千依女 久須波良部千依女」、内面に「久須部」・「久須」などと墨書された骨蔵器とみられる土師器甕が出土した（辻1999）。SI213の「久須」が吉祥句ではなく、久須波良部を表したものであるならば、角田台遺跡は逆巻郡だけではなく、相馬郡とも関わる可能性が高い⁸⁾。そして、角田台遺跡の久須波良部は馬との関りがあるといえる。なお、久須原（部）については正倉院文書中の常陸国戸籍にもみえ、相馬郡にだけ居住していたのではない。しかし、角田台遺跡の「久須」が久須波良部ならば、地理的な近さから相馬郡の久須原部に関わると考える。

白井市木通内遺跡では「馬手」の墨書土器が出土した（第2図5）。「馬手」の文字は、9世紀中葉の土師器杯の体部外面に横位で記されたものである。この墨書土器を紹介した鈴木普二男によれば、土器は土地の所有者が耕作中に偶然発見したもので、遺跡は以前から土器がよく出土しているところとのことである。「馬手」の読みについては「ウマテ」や「ウmanoテ」とする案を述べ、意味については断定していないが、馬にまつわる文字であり、人名とする見解があることを述べている（鈴木1979）。また、白井市教育委員会はこの土器を市指定文化財として指定し、報告している（戸谷2018）。なお、白井市郷土資料館では「まで」という読み仮名をふっている。

「馬手」の土器とともに類似の土師器杯が出土した（第2図6）。ただし、こちらの土器には墨書がない。遺存のよい複数の土器が出土しており、これらは竪穴建物から出土した可能性が高い。発掘調査が行われていないため遺跡内の遺構の様相は不明である。

5・6については、白井市郷土資料館の平成30年度企画展（酒井2018）において展示されており、展示中に実見する機会を得た。2点の土器はともにロクロ整形のもので、色調は橙褐色を呈する。同時期のものである。5は80%程度遺存しており、口縁部から体部外面にかけて1か所弧状に欠損する。そのほかは割れもなく遺存している。出土状況が不明のため断定しがたいが、土器の様相から欠損部は打ち欠きされた可能性がある。6は遺存が50%程度で、遺存している部分は割れない。しかし、欠損部の割合が多いことから打ち欠きされているか断定しがたい。

群馬県高崎市吉井町矢田遺跡では、83号竪穴建物から「牝馬 馬手 為鳴名」と刻まれた石製紡錘車が出土した（春山ほか1990、関1992、高島・宮瀧2002）。こ

の刻書文字の「馬手」について、春山秀幸氏は馬の調教にあたる職名ともみられるものの不確定とした。また、関和彦氏は「馬手」が古代の戸籍に多々みえることから、「馬手」は人名または馬名と指摘した。関氏は「牝馬」についても「化馬」の可能性があるとし、養蚕と馬との関係を考察している。さらに、「嶋名」については「馬手」とは別の人名とした。しかし、群馬郡に嶋名郷があり、古代の多文字資料のあり方として、地名と人名がセットになる例が多いことから、「嶋名」については地名であり⁹⁾、嶋名郷を出自とする「馬手」という人物の祭祀に関わる刻書文字とみた方がよい。この「馬手」は「牝（化？）馬」から、馬と関わる人物である。関口功一氏はこの紡錘車の刻書文字について馬匹生産との関係を指摘し、矢田遺跡周辺に牧が存在したことを想定している（関口2016）。

動物名+手は古代の人名の付け方の一典型であり¹⁰⁾、木通内遺跡の「馬手」については筆者も人名の可能性が高いと考える。この「馬手」が馬と関わりのある人物であったかどうかは断定しがたいが、馬の付く人名が墨書された背景として三宅郷における馬匹生産や私牧との関係があるとみる。

八千代市白幡前遺跡では、大型土坑P168から、馬2頭・人骨1体・貝類・土器群が出土した（第2図8）（大野ほか1991）。馬・人骨は土坑底部付近から、貝類・土器群は埋土中・上層からの出土である。貝の量はあまり多くない。ハマグリが主体で、シオフキとカガミガイを含む。土器群は土師器杯・皿、須恵器杯で、報告書に図示されているのは5点である。概して遺存がよい。そのうち、3点に「生」の墨書がある。なお、「生」墨書をもつ土師器杯2の口縁部に若干の欠損があるが、ほかはほとんど割れずに遺存がよいため、欠損部は打ち欠きされているとみる。この土坑から出土した骨について、松井章氏は馬2頭・人間1人の全身遺体であると分析・報告した（松井氏はカタカナ表記）（松井1991）。また、それらはなんらかの戦乱に伴う犠牲者・犠牲獣を投棄または埋葬したものと考察した。これに対し、馬2頭・人間1人をなんらかの祭祀のため生贄として殺害したという見方もありうるが、断定しがたい。なお、土器群および貝類については死者に供えられたものとみる。人・馬の埋葬および土器・貝などが供献された時期は土器群の様相から9世紀中葉である。なお、全身の埋葬であるから馬については解体されていない事例である。

4 馬牛等の利用と下総国の奈良・平安時代遺跡

本項では前項と関連する事柄や下総国全体及び一部他地域の資料をとりあげて、馬牛等の利用を考える。

(1) 馬牛関係の文字資料・駄馬・騎馬

千葉県における「馬」の文字資料をもつ遺物について、2018年8月時点での『明治大学古代学研究所 墨書・刻書土器データベース』及び1996年時点での千葉県による集成でみると(天野ほか1996)、その量は少ない。なお、ここでは「午」の文字資料を検討対象としない。資料は不確実なものを含めて14例である(白井市木通内遺跡が漏れているため、これを含めると15例となる)が、ここでは下総総社跡から出土した「相馬」を含めない。そのうちのいくつかの資料をみていく。まず、八千代市上谷遺跡であるが、A036竪穴建物から「承和二年十八日進野立家立馬子召代進」と書かれた紀年銘をもつ長文墨書が出土している。「立」が部姓か名か判然としないが、「馬子」は人名であり、延命祈願の墨書土器である(武藤2001・朝比奈2005)。東金市山田水呑遺跡は「馬雁カ」の墨書土器がある(浜名ほか1977)。成田市中台遺跡は「馬井」の線刻土器がある(天野ほか1981)。名木鎌部遺跡は「□馬」の墨書土器がある(石倉2012)。市原市荒久遺跡ではC地点から「馬」の墨書土器が出土した(北見2011)。銚子市長塚十二山遺跡(大賀1987)でも「馬」とみられる墨書土器が出土した。

下総国分寺からも長文墨書が出土しているが、これについては「牛」も含み、内容が豊富であるため後述する。そのほかに不確実であるが、習志野市谷津貝塚、上総国分寺、市原市稲荷台遺跡から可能性のある資料がある。

以上の資料は人名やその省略形を含む可能性があり、馬そのものを表したのかどうかは、慎重に検討しなければならない。しかし、出土遺跡は国府・国分寺及びその周辺遺跡のほか、地域の拠点的な遺跡が多い。

「馬」に比べれば、「牛」を含む文字資料は多く、明治大学のデータベースで、17遺跡58例を数える。しかし、事例は多いが、我孫子市羽黒前遺跡の「牛万」・匝瑳市飯塚遺跡群柳台遺跡の「牛成」は人名とみられることから、「馬」と同じく「牛」墨書も牛そのものとの関係性が強いとは断定できず、個々の遺跡の様相を含めて資料を慎重に検討する必要がある。資料のうち下総国分寺・鳴神山遺跡・中台遺跡は「馬」・「牛」がともにみられる遺跡である。また、谷津貝塚も「馬」が確実であれば、それらに加わる遺跡である。

下総国分寺跡第10調査区SD002からは豊富な文字内容をもつ墨書土器が出土した(山路ほか1994、山路1994)。この土器の元々のかたちは土師器高台付皿であるが、高台部が欠損しているため皿状となっている。墨書はほぼ体部外面の半分に記入され、一部は高台部欠損後の貼り付け面にかかっている。体部の墨書は右から「馬」・「牛」・「判」・「荷酒」・「判」・「□人足馬荷」・「杼杼」・「遊女杼」・「荷酒」と正位で書かれ、また、「牛」の下には墨画がある。この墨書土器を考察した山路直充氏は、文字は文章ではなく、習字のようなものであり、墨画は牛または馬の顔を表したものである。底部外面にも「井上」の墨書があるが、これは市川広小路付近に推定される東海道の井上(いかみ)駅を表すものである。なお山路氏は「井上」とそのほかの墨書は筆致が異なることを指摘している。また、文字は交通や交易に関わるのもであり、「酒」や「遊女」を含めると、江戸時代の宿場を連想させる内容と指摘している。

この墨書土器からうかがえる馬の役割としては、「馬荷」・「荷酒」があることから荷駄用がその一つであり、酒などの重量物を運搬した駄馬である。ただし、井上駅に関わる墨書であるから、連絡・伝達用、騎乗用としての側面も否定できない。「荷酒」・「杼」墨書からは下総国府周辺で酒や布製品の製造をしていたことがうかがえ、下総国府周辺における手工業生産のあり方をも考えさせる資料である。「牛」については馬同様、運搬用もあるが、下総国府であれば乗用の牛車が存在した可能性もある。さらに、牛の場合、蘇の生産や牛黄などの薬用品の調達もある。また、馬牛ともに死亡した場合には皮革生産が考えられ、さまざまな用途がある。ただし、この墨書土器の場合、生きているときの使役の様相が強いとみる。なお、「遊女」については現代的な意味合いだけではなく、貴人を供応して和歌を詠めるような教養をもつ女性の可能性がある。このように、この墨書土器からはいろいろなことを想定できる。その性格については駅や国府市周辺の観念的な世界を表現した可能性を若干考慮しなければならないが、精神世界も含めて下総国の都市である国府周辺の様相を示す墨書土器である。

馬関係の文字資料について房総以外の資料をとりあげる。「馬長」と書かれた墨書土器が、静岡県伊場遺跡の溝(山本ほか2008)および茨城県那珂市下大賀遺跡の第5号竪穴建物(内田2015)から出土した。伊場遺跡の「馬長」について、向坂鋼二氏・山中敏史氏・佐々

木虔一氏は伝馬を管理する伝馬長と理解している（向坂2010・山中2010・佐々木1995）。これに対し、渡辺晃宏氏は職制の名称とは断定できず、人名の可能性を否定できないとした（渡辺2010）。下大賀遺跡の「馬長」について、内田勇樹氏は他資料のあり方から人名の可能性が高いと考察した（内田2015）。ただし、人名であるとしても馬を管理する比較的地位の高い人物とも考えられるとして、馬との関りを想定している。「馬長」については、人名として常陸国戸籍や上毛野朝臣氏にも存在する（田中2008・関口2016）。伊場遺跡の場合、遺跡の性格から職制との関りを完全に否定はしないが、まずは人名の可能性が高いと考える。なお、常陸国戸籍には「日下部□馬女」の人名がある。常陸国戸籍については女子の割合が高いことが不自然視されている（志田1974）が、女性にも「馬」をもつ人名が付けられることがあったとみる。「馬」の付く人名は上記以外でもしばしば文献史料にあることから、二字の墨書が出土した場合、まずは人名の可能性を探ることが必要である。これは「牛」や「猪」などほかの動物名についても同様である。

茨城県笠間市（旧岩間町）東平遺跡からは「騎兵長十」の墨書土器が出土した（海老澤・黒澤2000、平川2000、平川2014 a）。この墨書土器の年代については黒澤彰哉氏や平川南氏によって9世紀第一四半期の範囲内に含まれることが指摘された。東平遺跡は東海道の安候駅家の推定地であり、堅牢・長大な礎石建物が見つかっている。東平遺跡を考察した黒澤氏はこのような建物がどこの駅家にも存在するとは考え難いとして、東平遺跡の特殊性を指摘している。安候駅家は常陸国府から陸奥に向かう最初の駅家であり、征夷の拠点となった遺跡である。「騎兵長」の墨書はこのような環境の中で記されたものであり、黒澤氏は騎兵が東平遺跡に常駐していた事実を現すと考察している（黒澤ほか2001）。

騎馬・騎兵については、『続日本紀』神亀元年（725）四月の記載から、下総国を含む坂東9カ国においても存在したことがわかる。また、『続日本紀』天平九年（737）四月戊午条にも下総国等に関わる騎兵関係の記載があり、さらに、宝亀七年（776）五月戊子条には征夷戦において下総国等の騎兵が動員された記載がある（松本2003）。

続日本紀の天平宝字八年（764）十月三十日の記事には東海・東山等の国に騎女を貢進させるというものがあ

り（黒板編1977）、奈良時代の東日本には馬術に精通した女性が存在した。馬牧が多い下総国にも騎女は存在したとみる。

茨城県石岡市北の谷遺跡から出土した土師器甕の骨蔵器には「馬飼部（磨または麻呂）」の墨書が人面墨書とともに記されている（吉澤1999¹¹）。この土器は常陸型の甕で、吉澤悟氏は9世紀中葉の暦年代をあてている。平安時代の常陸国府周辺に馬飼部とよばれる馬の飼養を職掌とする部民の末裔が存在したことを示す資料である。この土師器甕骨蔵器について、吉澤氏はこれまでのところ骨蔵器に人面墨書が描かれた例がないことから、祭祀用の人面墨書土器を埋葬用の骨蔵器に転用した稀有な事例と考察している。しかし、人面こそないものの先述した我孫子市西大作遺跡出土土師器甕の骨蔵器には「久須波良部千依女」という人名が墨書されており、北の谷例と近似した資料である。西大作遺跡の甕が墨書を施した時点で骨蔵器とされたならば、北の谷例も転用ではなく、人面が墨画された時点で骨蔵器専用となった可能性がある。双方とも同じ常陸型の甕であることから常陸・下総に同様の精神文化が存在したとみる。この点については当初から吉澤氏も懸念しており、今後、人面墨書や明確な人名墨書のある骨蔵器が多数発見されるようなことがあれば評価し直す必要があることを述べている。西大作例の一例が加わるだけで専用と断定することについて慎重であるべきという考えもあろうが、火葬骨蔵器は類例の少ない資料であり、転用の積極的な根拠もないことから専用の可能性を高く考える。その場合、「馬飼部文？麻呂（磨）」は被葬者本人といえる。なお、北の谷遺跡の甕は口縁部にわずかな欠損があるほかはほぼ完形の土器である。欠損部は2か所のようにであるが、欠損の大きい方は打ち欠きされた可能性がある。

（2）馬牛の飼育と牧・集落

鳴神山遺跡Ⅱ040土坑からは東京湾産の貝が出土しているが、古代の印播では鳴神山遺跡のほかに多くの遺跡から東京湾産の貝が出土している。このことに注目したのが石戸啓夫氏（石戸2013）と西野雅人氏（西野2016）である。両氏の研究によれば印播で東京湾産の貝が出土しているのは船穂郷内では船尾白幡遺跡・油免遺跡であり、村神郷では上谷遺跡・境堀遺跡の保品地区の遺跡群、白幡前遺跡・権現後遺跡・北海道遺跡の萱田地区遺跡群、村上込の内遺跡（天野ほか1974）である¹²。奈良・平安時代における船穂郷・村神郷の拠点的な集落遺跡から出土していることがわかる。このうち船尾白幡遺跡・権現後遺跡・北海道遺跡

は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて貝が出土した遺跡であり、西野氏は内陸部に貝の流通が始まるのは古墳時代後期の6世紀以降としている。また、西野氏は東京湾岸から村神郷・船穂郷に貝が運ばれたルートについて最も可能性が高いものとして、花見川から新川（平戸川）に続くルートを指摘している。しかし、花見川低地の集落の分析例がないことや、東京湾奥の代表的な遺跡である習志野市谷津貝塚（笹生・大口ほか2013など）・船橋市印内台遺跡などとは貝類の組成が一部で異なることから、村神郷・船穂郷で出土した貝の直接の入手先については慎重な姿勢を示している。萱田遺跡群の中核集落である白幡前遺跡は貝の出土が多く、白幡前遺跡の集落が流通や採取に直接関わった可能性も指摘している。一方で浮嶋駅周辺の市から入手した可能性を示しているのは、村神郷・船穂郷の集落と谷津貝塚・印内台遺跡などの遺跡群でハマグリやシオフキの出土が共通することによるとみる。筆者は6世紀以降、印播の遺跡で貝が出土するのは、貝食の盛行ということだけではなく、馬牛の飼育が関わっていると考えている。馬牛の飼育には大量の塩が必要である¹³⁾ことから、東京湾沿いの集落や市から印播の集落にもたらされたのは貝等の海産物だけではなく、塩も含まれていたと考える。特に奈良・平安時代においては馬牛の増加に伴い、谷津貝塚・印内台遺跡などの菊田川・海老川流域の拠点的な遺跡群と村神郷・船穂郷内の拠点的な遺跡群の関係が密接化したと考える。東京湾岸の製塩については戦国時代の船橋市域で史料的に確認できる（濱名2007）が、現在までのところ奈良・平安時代の製塩遺跡は発見されていない。しかし、発見されないのは東京湾岸域が古くから開発が進んだ地域のためであり、船橋や市川などの砂州上には奈良・平安時代の製塩遺跡が存在するとみる。

古代房総の漁撈民を検討した天野努氏は印内台遺跡について漁村型集落遺跡の性格をもつことを指摘している（天野2001）。ただし、印内台遺跡では内陸の集落遺跡同様、一般的な鉄製農具類が出土していることから農業も行われており、天野氏は半農半漁的な集落と考察した。この印内台遺跡のような半農半漁的な性格をもつ集落は東京湾岸に広く存在することが天野氏によって指摘されている。ただし、印内台遺跡は葛飾郡栗原郷の拠点的な集落であり、郷内・郡内および下総国でのあり方について小規模な集落とは同列に扱えない面がある。

国内の各地に所在する栗原郷を考察した平川南氏は

栗原郷の多くが国府に近い位置にあり、また、馬牛骨の出土から牧的な要素をもつことを考察した（平川2014b）。下総国葛飾郡栗原郷もそのような性格の郷であり、郷内を代表する印内台遺跡や本郷台遺跡（松浦・諏訪1980）では馬骨が多く出土した。

谷津貝塚は近年の調査により、『延喜式』にみえる浮嶋牛牧の中心遺跡であると考察されている（笹生・大口ほか2013）。谷津貝塚の地形をみると、遺跡の北方にはかつて「庄司ヶ池」という広大な池が存在した（小日置ほか2011）。また、その南西にも窪地が存在している。一方、遺跡の南方も海岸低地から東に延びる谷が存在する。このように遺跡の北方・南方は自然地形により区切られているが、それは偶然ではなく、牧はそのような地形のところを選んで設定されたと考えられる。遺跡の西側は海岸低地までやや距離があり、牧がどこまで広がっていたかは今後の課題である。遺跡の東側は台地が続いていくので、どこかで牛が逃げ出さないための柵が設けられたとみる。「庄司ヶ池」は水害防止のための排水工事により現在では消滅したが、古代においても水を湛える場所であったならば、牧内の牛の水飲み場であるとともに牧外に牛が逃げ出さないための自然の要害である。

市川市北下遺跡旧河道8区からは「井」・「浮嶋郷長」と墨書された8世紀後半の須恵器杯が出土した（今泉・大久保ほか2014）。谷津貝塚については浮嶋牛牧の中心集落であるとともに、浮嶋郷の中心集落、すなわち郷家集落と考える。また、駅館は見つかっていないが、谷津貝塚の近くには、古東海道の駅家である浮嶋駅が存在したことが確実である。『和名類聚抄』における下総国葛飾郡の郷名には「浮嶋郷」はなく、「駅家郷」がみられることから、「浮嶋郷」と「駅家郷」は同一の郷を指すとみられている（山路2014）。

以前、筆者はそれまでの研究情勢にしたがい、下総国を中心とした郷の比定地を示した分布地図を報告書に掲載した（岸本・糸川ほか2009）が、そのなかで千葉郡山家郷については、千葉市幕張付近とした。しかし、山家郷については白井久美子氏により、千葉市土気周辺を比定地とする考えが提示され（白井2014）、現在はその方に妥当性があると考えている。また、筆者が示した下総国郡等の位置図では下総国府周辺に豊島郷・駅家郷・余部郷がかたまっているが、上記したとおり、駅家郷（浮嶋郷）は浮嶋駅周辺に比定される。なお、下総国府・葛飾郡家周辺に関しては豊島郷であるという山路直充氏の見解にしたがう（山路2014）。

その場合、下総国における東京湾沿いの郡郷に関しては、西から葛飾郡大島郷・葛飾郡豊島郷（国府・郡家所在郷）・葛飾郡栗原郷・葛飾郡浮嶋郷（駅家郷）・千葉郡三枝郷・千葉郡池田郷・千葉郡千葉郷となり、葛飾郡から千葉郡にいたる各郷と比定地の関係は、非常にスムーズになる。

葛飾郡と千葉郡の境について、山路氏は船橋市三山に所在する二宮神社が千葉郡の延喜式内社寒川神社の想定地とされていることから、菊田川とその上流の田喜野井川としている（山路2012）。この想定では浮嶋郷の範囲がかなり狭くなる点を懸念するが、歴史的経緯を重視した山路氏の見解にしたがう。浮嶋牛牧・浮嶋駅・浮嶋郷（駅家郷）がほぼ重複する同一の地域とすると、牧長・駅長・郷長が代々同一人物であるかどうかは今後の問題の一つである。

北下遺跡では国分川の旧河道から馬骨が多く出土した（小林・大久保2017）。馬の最小個体数は、分析を行った植月学氏によれば、最小8体～12体で、ほぼ頭骨で占められている。年齢は4歳前後の若獣でまとまっており、自然死とは考えにくいという。『延喜式』に定められた馬の貢上の年齢に近いことから、選抜の結果、排除された個体が集積され、儀礼に用いられたと考察している（植月2017）。北下遺跡の場合は国レベルの祭祀が行われているが、鳴神山遺跡のような集落でも土坑から馬骨が祭祀的な様相で出土しており、祭祀にあたって馬が広範に使用されたことがわかる。

市原市荒久遺跡B地点のSI-024竪穴建物からは、「蘇」と書かれた墨書土器が出土した（北見2011）。蘇は牛乳を煮詰めた乳製品であり、佐藤健太郎氏はその用途として①薬用、②食用のほか③仏教との関りが深い施物・供物用としての用途を指摘している（佐藤2012）。また、廣野卓氏も古代の乳製品について詳細に考察し、蘇は生産量の少ない貴重な製品であることを明らかにした（廣野1995・1996）。SI-024の「蘇」は土師器皿の口縁・体部外面に正位で記入されており、それを含む出土遺物の様相から、SI-024が構築された歴年代については9世紀中葉と考える。「蘇」墨書土器の竪穴内での出土位置は不明である。「蘇」墨書土器の写真をみると、土器は「蘇」の際で1か所が弧状に欠損するが、そのほかは割れもなく遺存しているようであり、欠損部は打ち欠きされたものとみる。

荒久遺跡は上総国分僧寺に隣接した遺跡であり、国分僧寺関係の工人などが居住した集落である。上総国分僧寺からは「油菜所」と書かれた墨書土器が出土し

ており、佐藤氏や宮本敬一氏は上総国分僧寺・尼寺で蘇や灯明を用いた法会が行われていたと考察した（宮本1998、佐藤2012）。また、上総国は『延喜式』（巻23・民部下）で蘇の貢進国の一つにあげられているが、平城京二条大路出土の荷札木簡に記載された「上総国精蘇」により、天平年間には蘇を貢進していたことが考古学上からも判明した。廣野氏はこの精蘇について、硬質チーズのような製品であると考察している（廣野1996）。

下総国では「蘇」の文字資料は出土していないが、浮嶋牛牧の中心地とみられる谷津貝塚からは牛骨が多く出土している。下総国も上総国同様、蘇の貢進国の一つであり、谷津貝塚は下総国のなかで蘇の生産量が最も多い遺跡と考える。あるいは、蘇の生産は谷津貝塚のみであったかもしれないが、断定を保留する。

また、『続日本紀』の文武天皇二年十一月の記載から下総国が薬品である牛黄を献上していたことがわかる。牛黄の生産についても谷津貝塚が中心的な遺跡であったとみる。

『延喜式』巻第四十八 左右馬寮には、下総を含む十三国から、繋飼の馬牛を貢上するように規定した記載がある。

鳴神山遺跡や角田台遺跡に存在したであろう馬牛の調達先としてまず考えられるのは、牛の場合は谷津貝塚を中心とした浮嶋牛牧であり、馬の場合は高津馬牧であるが、印内台遺跡など栗原郷内の遺跡も候補である。

『延喜式』（巻二十八・兵部省）には下総国の官牧として高津馬牧や浮嶋牛牧など5か所の牧が記されているが、そのなかの一つに大結馬牧がある。この大結馬牧の比定地について、吉井哲氏は『延喜式』神名帳にみえる葛飾郡意富比（おおひ）神社（船橋大神宮）やのちの船橋御厨（夏見御厨）の存在および印内台遺跡の様相から船橋市夏見付近とする説を第一にとりあげ、異説として茨城県常総市大生郷町・同古間木一帯とする説をあげている（吉井2001）。大結馬牧の比定地を船橋市夏見付近とする説については、東京湾沿いに市川砂州から延びる船橋砂州や夏見潟の存在など、地形的な要因からも妥当と考える。

船穂郷・村神郷等の諸集落で良馬・良牛が生産された場合は、逆に高津馬牧や浮嶋牛牧などの官牧に納めた可能性もあるとみる。集落間における生産品としての馬牛の流通は今後の検討課題である。

馬小屋遺構については篠崎穰治氏によって詳細な分

析や考察がなされている（篠崎2010）。初期荘園遺跡である酒々井町飯積原山遺跡を考察した木原高弘氏は庄所遺構の建物群のなかに馬小屋遺構が存在することを明らかにし（木原2016）、房総の遺跡においてもその存在が指摘されるようになった。馬小屋遺構は今後、類例が増加するであろう。

（3）馬と製鉄関連遺跡

流山市富士見台第Ⅱ遺跡C地点は8世紀第一四半期の製鉄及び製鉄に関わる工房集落である（小栗1998）。堅穴建物群中にあるB4-04P土坑から馬歯が出土したが、鑑定の結果は「6～8才馬（比較的若い熟年獣）の臼歯列および顎部」であった。同様の製鉄遺跡である流山市中ノ坪第Ⅱ遺跡でも土坑中から馬歯が出土していることや、柏市鴻ノ巣遺跡の鍛冶工房から土馬が出土している（矢戸・古内1974）ことから、小栗信一郎氏は製鉄遺跡の祭祀に馬が関与した事例と考察している。

上記の事例から、製鉄関連遺跡では資材の運搬に馬が利用されたとみる。馬は現代でいえば重機や車に匹敵する重要なエネルギーであることから、古代人はただ使役するだけではなく、大切に扱い、尊重した¹⁴⁾。土馬として祭り、死後埋葬したのはその表れである。牛も馬同様、力の強い動物であり、役畜として広く使用された。また、軍事にさいしては馬同様に軍需物資を運搬する役目も期待されていた。牛は蹄が2本であることから1本の馬と比べて坂道での利用も優れている。しかし、牛と馬の違いは速度、すなわち機動力の違いにあることは明らかである。製鉄遺跡などで運搬作業が行われた場合、馬は牛と比べて何倍も仕事ができたと考える¹⁵⁾。山林での作業についても馬の方が牛よりも優れているとみる。なお、製鉄関連遺跡において馬の死後も皮革生産のためのなめし行為が行われたかどうかは不明である。

（4）鹿について

馬牛から離れるが鹿は皮革生産などの面から馬牛と共通点がある動物である。西野雅人氏は奈良・平安時代の鹿の京進について考察している（西野2017）。下総でも上総や常陸ほどではないものの相当数の鹿を貢納していることがわかる。谷津貝塚は奈良・平安時代とみられる鹿骨が出土した遺跡であり、鹿に関わる製品を京進または国府に納めた遺跡の可能性もある。鹿骨は印内台遺跡でも出土しているが、量は少なく、奈良・平安時代のものか断定しがたい。

南西ヶ作遺跡004堅穴建物のカマド内からはカマド

祭祀に関わる鹿骨が出土している（香取ほか2008）。この鹿骨については祭祀用の獣骨として遠隔地から入手した可能性を否定しないが、船穂郷北方の分水界地帯は下総における鹿の獲得場所の一つであった可能性がある。

鹿については『常陸国風土記』信太郡条の記載から、常陸南部・下総北部の葦原地帯で両国が鹿の狩猟を行っていたことがわかる。この記載には「大猟」とあり、また葦原の鹿の味は腐っているようであり、山で獲れる鹿よりもまずい意味のことが記されている。この記載から奈良・平安時代にあっても人々は鹿肉を食べていることがわかる。また、「大猟」および山の鹿との味の比較が記されていることから、台地上でも狩猟を行っているが、それは低地よりも効率が悪いことがうかがえる。鹿は台地上と低地の水辺を行き来しており、別種のものではないことから、低地での鹿の狩猟は食べ飽きるほど獲れたのである。鹿は奈良・平安時代に狩猟され、食肉や皮革生産、また、鹿角の利用・祭祀が行われたが、一部は郡家や国府に納められ、京進された。

おわりに

鳴神山遺跡の墨書土器から下総国船穂郷の中心集落においては、死後、馬牛が解体されて皮革生産のためのなめし行為が行われたと考えた。解体の場合は鳴神山遺跡の場合、東方に流れる戸神川の低地（西根遺跡）であり、解体に際して戸神川の水を利用したとみる。西根遺跡は鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡の居住者が耕作した谷津田であり、船穂郷長が祭祀を執行する場でもあった。食肉としての利用がどれほど普遍的かはわからないが、鳴神山遺跡の場合、「身體」の墨書文字からあり得ると考える。ただし、馬牛の肉を食べるのは祭祀的な様相を帯びたものの可能性がある。なめし行為が普遍であるかどうかについても今後の検討課題であるが、馬牛以外の動物である鹿についても食肉や皮革生産等のために捕獲されており、なめし行為が広く行われたと考える。

北下遺跡では国家的な祭祀用として犠牲馬の頭部利用が行われていた。鳴神山遺跡の大型土坑から出土した馬骨も遺存していたのは頭部のみであるから、地域の拠点的な遺跡においても祭祀用として頭部のみが使用される場合があったのかもしれない。しかし、頭部、特に歯はほかの骨と比べて多く遺存する傾向があるため、慎重な検討が必要である。

一方、同様に拠点的な集落である白幡前遺跡では、馬の全身が埋葬されており、埋葬のあり方も一様ではない。ただし、白幡前遺跡の場合は人も埋葬されているため、特殊なあり方かもしれない。馬の埋葬の全体的な様相についても、今後の検討課題である。

鳴神山遺跡と白幡前遺跡の大型土坑では馬の埋葬の仕方が違うが、墨書土器等の土器群や貝の出土は共通する。村神郷や船穂郷等の諸遺跡から出土した貝の様相から、それらの遺跡と東京湾岸の諸遺跡との関係を考えた。また、東京湾岸地域からもたらされたのは貝等の海産物だけではなく、馬牛飼育にかかわる塩も含まれていると想定した。あるいは、馬牛飼育に関わる技術指導総体とみたほうがよいかかもしれない。しかし、塩の流通については製塩の把握が不十分であり、これも今後の検討課題である。

奈良・平安時代の下総では馬牛が広範に利用されていた。もちろん、これは近隣の他国も同様である。馬の利用については、生きているときには運搬用・騎乗用・軍用・農耕用などがあり、死後は皮革生産や食肉としての利用、祭祀的な場での利用などがある。このうち軍用の場合は騎兵が騎乗する騎馬としての利用と、兵糧ほかの軍需物資を運搬する輸送用の二面がある。牛の場合は兵士の騎乗はないが、陸路における軍需物資の輸送は、馬同様に存在した。農耕用としての馬牛の利用はあったとみるが、下総の場合、考古学的な痕跡に乏しく、今後の検討課題である。さらに、牛については文献から蘇や牛黄の生産・貢納があったが、市原市荒久遺跡の墨書土器や「上総国精蘇」の木簡から考古学的にも裏付けられた。下総国ではこれまで「蘇」墨書土器の出土はないが、上総国同様、蘇貢納国の一つであり、蘇の生産が行われていた。その主要な生産地として浮嶋牛牧の中心地である谷津貝塚を想定した。

下総国は馬牛の貢上国の一つであり、それらは主として高津馬牧・大結馬牧・浮嶋牛牧等の官牧から供給されたものである。また、これまでみてきたとおり、村神郷・船穂郷等の集落だけでなく、少なくとも下総国の拠点的な集落については馬牛との関りがあるとみるが、それらの馬牛と官牧の馬牛との関係も今後の検討課題である。

鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器に導かれて記述してきたが、かなり雑駁なものになってしまった。根拠の乏しいところや遺漏も多いと思われる。大方のご教示をおおぐ次第である。

最後に、本稿を成すにあたって、日ごろご教示をいた

だいている栗田則久氏や芝田英行氏をはじめ、石戸啓夫氏・大久保奈奈氏・小林清隆氏・戸谷敦司氏のご協力をいただいた。また、図面の作成で山口典子氏・小笠原敦子氏のご助力をいただいた。以上、ご芳名をここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿では、船尾白幡遺跡について、郷の管理施設や官衙風建物群等といわれる掘立柱建物群などをもつ西側のⅡ遺跡に対して、東側を便宜的にⅠ遺跡と呼ぶ。Ⅰ遺跡とⅡ遺跡は、戸神川支谷（西根遺跡）南西方から北に侵入する小支谷を境に区別されるが、北側は地続きであり、明確に区分できない。そのため本稿でⅠ・Ⅱを付けずに船尾白幡遺跡と記述する場合は、Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡の総体を指す。
- 2) 郷家集落にみられる集中的な掘立柱建物等の遺構群などについて、本稿では菅原幸夫氏が使用された「官衙風建物群」（菅原1998）を使用する。
- 3) おおむね印旛沼東南の地域は狭域、北西の地域は広域といえるが、高崎川中・上流域の開発が進んだことにより、8世紀後半以降、印旛沼南東の印播郷はかなり広域になったとみる。
- 4) 筆者は、以前、言美郷の郷域等について述べたことがある（糸川2018）が、そのときに、このことについて言及した石戸啓夫氏の論文（石戸2013）を見落とすという失態を犯してしまった。筆者の浅学を恥じ、ここで改めてとりあげることにより、石戸氏への非礼を少しでも埋めることとする。さて、石戸氏は印西市北部を埴生郡酢取郷とするが、その根拠について、筆者は以下のように推察した。

①印西市別所に所在する池ノ下遺跡から「埴生郡酢取郷…」の墨書土器が出土していること。②印西市大塚周辺に所在する大塚前廃寺から「埴」の刻書瓦が出土していること。③印西市域は元々一つの地域ではなく、水環境の違いから南部を印播郡、北部を埴生郡とすることが妥当であること。④中世において印西市北部は埴生西郡であること。

それに対して、筆者は印西市北部を印播郡言美郷とするが、その根拠は以下のとおりである。

①「常陸国風土記」の景行天皇国見伝説で、景行天皇が後の行方郡方面を眺望した「印波の鳥見丘」が印西市平岡・小林地域であるという清宮秀堅の所説（清宮1905）。なお、好字を付けるという律令政府の方針により、ほかの多くの郷と同様に、「鳥見」が「言美」に転換したと考える。「言美」は「とみ」と読んだのかもしれないが、不明である。②『和名抄』の郷名記載には、隣接する二郷が続けて記載される場合がある。印播郡の場合、言美郷は三番目で、四番目の三宅郷が続けて記載されている。三宅郷は印西市小倉に比定されるとみられることから、言美郷は印西市北西部である小倉周辺に隣接する地域と理解できる。船穂郷は印西市南部である船尾周辺に、吉高郷は印西市東部（旧印旛村）である吉高周辺に比定されることから、言美郷は必然的に印西市北部地域となる。郷名の記載順についての考え方は、山路直充氏の考察に拠っている（山路2009）。

なお、以前に鳥見神社が印西市北部地域に多く分布することを根拠の一つにあげたが（糸川2018）、鳥見神社の分布が奈良・平安時代の郷（里）比定の根拠となるか、より検討しなければならないという考えに至ったため、本稿では根拠としない。

石戸氏の①・②について、コメントする。地名を表した文

字資料は、石戸氏の指摘するとおり、本貫地から出土する場合は最も多いが、それは当然のことである。しかし、本貫地から出土していない文字資料は角田台遺跡（明らかに印播郡内の遺跡である）から出土した「逆差郡…」(香取2006)のほかにも、しばしばみられる。以下、筆者の管見に触れた範囲でいくつかの事例を示す。まず、習志野市谷津貝塚は葛飾郡浮嶋郷（駅家郷）内の遺跡であるが、「豊嶋」の墨書が出土している。「豊嶋」は人名の可能性もあるが、地名であれば葛飾郡豊嶋郷を表す文字である（山路2014）。四街道市小屋ノ内遺跡（糸川ほか2007など）・稲荷塚遺跡（岸本・糸川ほか2009）は千葉郡物部郷の中心集落であるが、「物部」の墨書は見当たらず、稲荷塚遺跡で「物川」という墨書があるだけである。対照的に小屋ノ内遺跡で「山梨」の墨書が数点あるが、「山梨」は千葉郡山梨郷をさす文字である。同じく千葉郡内の千葉市鷺谷津遺跡（白井ほか2002）は池田郷内の集落であるが、「山家」の朱書が出土している。「山家」は千葉郡山家郷をさす文字である。大網白里市南麦台遺跡（山口ほか1994）は上総国山辺郡内の遺跡であるが、「下総国千葉郡千葉郷」の刻書紡錘車出土した。香取市東野遺跡では「殖生」の墨書土器が出土したが、東野遺跡は香取郡内の遺跡である（栗田ほか1988、川尻2001）。以上のように、出土した場所以外の地名を表す文字資料はしばしばあり、池ノ下遺跡だけが特別な存在ではない。次に、石戸氏の③であるが、丹波国水上郡は同一郡で水系の異なる二地域を含んでいる（平川2003）。この事例から、地理的環境の違いが必ずしも郡を分ける根拠にはならない。

筆者は殖生郡酢取郷の比定地は従来通り、成田市羽鳥周辺でよく、また、その付近は古墳時代以来の伝統的な集落が多いため、里（郷）域はかなり狭いと考える。もし、石戸氏の指摘するとおりに印西市北部が殖生郡酢取郷に比定されるとすると、印播郡言美郷はどこに比定されるのだろうか。印西市北部を酢取郷とする説が成立する前提として、言美郷の比定地を明示する必要がある。

郷の比定については、考古資料で断定できる場合は少なく、文献史料にも記載のない場合が多い。むしろ、言美郷の場合、手がかりとなる文献史料が存在するといえる。ほかの郷の比定地や歴史的事情を考慮すると、印西市北部地域については、印播郡言美郷とすることが妥当である。なお、糸川2018文献において、筆者は「酢取郷は東方の殖生郡麻在郷」と記述したが（38頁左段6行）、東方は誤りで、正しくは西方である。お詫びして訂正する。

- 5) 大塚前廃寺の「殖」を殖生郡とすることについては、すでに栗田則久氏や（栗田ほか1988）、石戸啓夫氏（石戸2013）、山路直充氏（山路2016）が指摘している。山路氏は「殖生郡が瓦の生産経費を負担した証」であり、殖生郡領である大生部直氏が船穂郷の開発に関わったと考察した。
- 6) 田形孝一は大塚前廃寺の大溝に注目し、鳴神山遺跡などの周辺集落域と有機的関わりをもつ可能性が極めて高いと考察した（田形1998）。
- 7) 栗田氏による編年では、鳴神山遺跡6期、9世紀第2四半期に比定されており、妥当な見解と考える（栗田2015）。
- 8) 角田台遺跡の「久須」が久須波良部を表した可能性があることについては、すでに栗田氏が指摘している（栗田2009）。
- 9) 「嶋名」が郷名であることについては、すでに高島英之氏・宮瀧交二氏が指摘している（高島・宮瀧2002）。
- 10) 同様のことは、すでに関和彦氏が言及している（関1992）。
- 11) この土器に書かれた人名については、「馬飼部文磨」と釈読した文献もある（千葉ほか2013）。
- 12) そのほかに西野氏は、八千代市南台遺跡で貝が出土してい

ることを記述しているが、出土資料は伴出した土器から古墳時代前期のものであり、本稿では検討対象としない。

- 13) 芝田英行氏のご教示による。
- 14) 山で伐り出した木材を運搬することを「馬搬（ばはん）」という。遠野馬搬振興会事務局長の岩間敬氏は、現代において「馬搬」を実践している一人であり、その取り組みについて「馬搬文化の継承・発展に取り組む」と題して、インターネット上で紹介している。その取り組みは、車が出現する以前の、人と馬の関りや文化について示唆に富む。なお、「馬搬」については篠塚結花氏から教示を得た。
- 15) 現代の馬搬作業について、岩間敬氏は、馬は1度に最大6本の丸太を運ぶことができ、1日にだいたい20往復することを紹介している。

引用・参考文献

- 朝比奈竹男2005『千葉県八千代市上谷遺跡』第1分冊 本文編-』八千代市遺跡調査会 天野努ほか1974『八千代市村上遺跡群』(財)千葉県都市公社 天野努ほか1981『公津原Ⅱ』(財)千葉県文化財センター 天野努ほか1996『出土文字資料集成』『千葉県の歴史 資料編 古代』別冊 千葉県 天野努2001『古代房総の漁撈民とその生産活動』『千葉県立安房博物館 研究紀要 VOL. 8』石倉亮治2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書13-成田市名木鎌部遺跡-』(財)千葉県教育振興財団 石田清彦1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-印西市白井谷奥遺跡-』(財)千葉県文化財センター 石戸啓夫2013『古代印波の水環境と集落形成-印西における古代集落形成の分析から-』『印西の歴史』第7号 印西市教育委員会 糸川道行ほか2004『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ-印西市船尾白幡遺跡-』(財)千葉県文化財センター 糸川道行ほか2007『四街道市小屋ノ内遺跡(3)』(財)千葉県教育振興財団 糸川道行2018『下総国印播郡言美郷を考える』『研究連絡誌』第79号(公財)千葉県教育振興財団 今泉潔1990『瓦と建物の相克』試論-大塚前遺跡出土瓦の分析-』『研究紀要12』(財)千葉県文化財センター 今泉潔1998『大塚前廃寺』『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 今泉潔・大久保奈奈ほか2014『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書6-市川市北下遺跡(9)~(12)-』(公財)千葉県教育振興財団 植木学2017『北下遺跡から出土した動物遺体』『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書11-市川市北下遺跡(14)・菅野遺跡(1)~(5)-』(公財)千葉県教育振興財団 内田勇樹2015『下大賀遺跡』(公財)茨城県教育財団 海老澤稔・黒澤彰哉2000『岩間町東平遺跡発掘調査報告-推定安候駅家跡出土の「騎兵長」墨書土器-』『婆良岐考古』第22号 婆良岐考古同人会 大賀健1987『長塚十二山遺跡』銚子市教育委員会 大野康男ほか1991『八千代市白幡前遺跡』(財)千葉県文化財センター 岡田誠造・森本和男2005『印西市鳴神山遺跡Ⅳ-戸神地区営農地造成関連埋蔵文化財調査報告書-』(公財)千葉県教育振興財団 小栗信一郎1998『富士見台第Ⅱ遺跡C地点』『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 香取正彦ほか2005『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ-印西市船尾白幡遺跡Ⅱ-』(財)千葉県文化財センター 香取正彦2006『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ-本埜村角田台遺跡-』(財)千葉県教育振興財団 香取正彦ほか2008『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ-印西市南西ヶ作遺跡-本埜村式斗米遺跡-』(財)千葉県教育振興財団 川尻秋生2001『集落遺跡と墨書土器』『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県 川尻秋生2003『大生部直と印波国造-古代東国史研究の一試論』『古代東国史の基礎的研究』塙書房(初出は2001『千葉県立中央博物館研究報告-人文

科学-」14) 川尻秋生2009「古代房総の国造と在地-印波国造と武射国造を中心に-」『房総と古代王権-東国と文字の世界-』高志書院 岸本雅人・糸川道行ほか2009「四街道市稲荷塚遺跡」(財)千葉県文化財センター 北見一弘2011『市原市荒久遺跡B・C地点』市原市教育委員会 木原高弘2016「酒々井町飯積原山遺跡における初期荘園について」『研究連絡誌』第77号(公財)千葉県教育振興財団 栗田則久ほか1988「ソナ遺跡(No.33)、東野遺跡(No.34)」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV-佐原地区(1)-』(財)千葉県文化財センター 栗田則久2009「墨書土器と印播」『房総と古代王権-東国と文字の世界』高志書院 栗田則久2015「古代印播郡船穂郷の開発」『研究連絡誌』第76号(公財)千葉県教育振興財団 黒板勝美編1977『続日本紀 後篇』吉川弘文館 黒澤彰哉ほか2001『東平遺跡発掘調査報告書-推定安候駅家跡-』岩間町教育委員会 小林信一ほか2005『印西市西根遺跡』(財)千葉県文化財センター 小林信一・大久保奈奈2017『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書11-市川市北下遺跡(14)、菅野遺跡(1)~(5)-』(公財)千葉県教育振興財団 小日置晴展ほか2011『谷津貝塚埋蔵文化財発掘調査報告書I』国際文化財株式会社 小牧美知枝2017『平成27年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会 齋藤毅2015『平成25年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会 酒井規子2018『平成30年度企画展 くらしの中の動物 ~身近なパートナーたち~』白井市郷土資料館 佐々木慶一1995「古代の交通と馬の利用」『古代東国社会と交通』校倉書房 笹生衛・大口和樹ほか2013『谷津貝塚埋蔵文化財発掘調査報告書III』テイケイトレード株式会社 佐藤克己・沼沢豊1973「大塚前遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』(財)千葉県都市公社 佐藤健太郎2012「古代日本の牛乳・乳製品の利用と貢進体制について」『関西大学東西学術研究所紀要』45号 志田諄一1974『常陸風土記とその社会』雄山閣 篠崎穠治2010『馬小屋の考古学』高志書院 白井久美子ほか2002『千葉市鷲谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター 白井久美子2014「千葉郡 千葉地域の集落-都川以南を中心に-」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課 菅原祥夫1998「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群-福島県山形市正直C遺跡・東山田遺跡の分析事例を中心として-」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所 鈴木普二男1979『のざらし紀行 白井町の文化誌』清宮秀堅1905『下総国旧事考』関和彦1992「矢田遺跡と養蚕」『矢田遺跡III』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 関口功一2016「東国の古代地域史」岩田書院 田形孝一1998「古代東国村落の造り道-下総国印播郡船穂郷・村神郷での事例-」『古代交通研究』第8号 古代交通研究会 田形孝一2008『《速報》発見!古代の郷(村)の管理施設-印西市船尾白幡II遺跡から古代を探る-』『印西の歴史』第4号 印西市教育委員会 高島英之・宮瀧交二2002「群馬県出土の刻書紡錘車についての基礎的研究」『群馬県立歴史博物館紀要』23号 田中広明2008『豪族のくらし』すいれん舎 千葉隆司ほか2013『平成25年度 特別展 理想郷とよばれた常陸国-古代茨城の魅力と実力-』かすみがうら市郷土資料館 辻史郎1999「意布郷久須波良部」の墨書土器『日本歴史』第615号 日本歴史学会 戸谷敦司2018『白井市埋蔵文化財調査集報-平成27・28年度-』白井市教育委員会 中山吉秀1976「離れ国分考」『古代』62号 早稲田大学考古学会 鳴田浩司・田形孝一1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書II-印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡-』(財)千葉県文化財センター 西野雅人ほか2003『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1-印西市松崎II遺跡-』(財)千葉県文化財センター 西野雅人2016「古代印播郡における東京湾産貝類の利用について」『印

西の歴史』第九号 印西市教育委員会 西野雅人2017「下総台地における縄文の狩猟活動解明に向けて(1)」『千葉縄文研究』第7号 千葉縄文研究会 萩原恭一2000『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XIV-印西市鳴神山遺跡III・白井谷奥遺跡-』(財)千葉県文化財センター 浜名徳永ほか1977『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会 濱名徳順2007「戦国時代の地域社会 産業の発展」『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県 春山秀幸ほか1990『矢田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平井真紀子ほか2014『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXV』(公財)千葉県教育振興財団 平川南2000「岩間町東平遺跡出土の墨書土器について」『婆良岐考古』第22号 婆良岐考古同人会 平川南2003「郡符木簡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館 平川南2014a「東海道推定安候駅家跡(東平遺跡)出土の「騎兵長」墨書土器」『律令国郡里制の実像』上巻 吉川弘文館 平川南2014b「古代社会と馬-東国国府と栗原郷、「馬道集団」-」『律令国郡里制の実像』下巻吉川弘文館(初出は鈴木靖民編2012『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館) 廣野卓1995『古代日本のミルクロード』中央公論社 廣野卓1996『古代日本のチーズ』角川書店 松井章1987「養老院牧場の考古学的考察-斃れ馬子の処理をめぐる-」『信濃』第39巻第4号 信濃史学会 松井章1991「白幡前遺跡出土の動物遺存体」『八千代市白幡前遺跡』(財)千葉県文化財センター 松浦有一郎・諏訪元ほか1980『本郷台』本郷台遺跡調査団 松本政春2003『奈良時代軍事制度の研究』塙書房 宮本敏一1998「上総国分尼寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 向坂鋼二2010「伊場・城山遺跡の古代文字資料」『伊場木簡と日本古代史』(株)六一書房 武藤健一2001『千葉県八千代市上谷遺跡』-第1分冊-八千代市遺跡調査会 矢戸三男・古内茂1974『柏市鴻ノ巣遺跡』(財)千葉県都市公社 山口直人ほか1994『南麦台遺跡』(財)山武都市文化財センター 山路直充ほか1994「下総国分寺跡 平成元~5年度発掘調査報告書」市川市教育委員会 山路直充1994「宿場を思わせる文字や絵」『広報いちかわ』平成6年8月15日号 山路直充2009「寺の成立とその背景」『房総と古代王権-東国と文字の世界-』高志書院 山路直充2012「下総国戸籍」の国・郡・郷」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 釈文編・解説編』市川市文化国際部文化振興課 山路直充2014「下総国の郡・郷・里・駅家」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課 山路直充ほか2014『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課 山路直充2016「古代の開発と船穂郷の大塚前廃寺」『いんざい再発見』第3号 印西地域史研究会 山中敏史2010「奈良に都があった頃の遠江と地方の役所」『伊場木簡と日本古代史』(株)六一書房 山本崇ほか2008『伊場遺跡発掘調査報告書 第12冊 伊場遺跡総括編(文字資料・時代別総括)』浜松市教育委員会 吉井哲2001「古代房総の牧と馬」『千葉県の歴史』通史編古代2 千葉県 吉澤悟1999「茨城県石岡市北の谷遺跡出土の人面墨書土器の検討」『筑波大学先史学・考古学研究調』第10号筑波大学歴史・人類学系 渡辺晃宏2010「出土文字資料からみた伊場遺跡群」『伊場木簡と日本古代史』(株)六一書房